



写真 情報教育セミナー in 金沢 (7月8日金沢学院大学)

題字 山崎 豊氏

石川県教育工学研究会

2002.3.3

第62号

足下を照らす教育工学研究の出番

常任理事・金沢市立諸江町小学校長 藤井 昭久

いよいよ教育改革本番の4月を迎える。各学校は大きな改革の波に洗われながらその準備を進め、独自のカリキュラムを編成して万全の体制を整えようと懸命に努力しているが、まだまだ課題が山積しているように思われる。

あまりにも大きな教育システムや指導方法の改善が次々と登場し、教師が消化不良に陥るのでないかと余計な心配をすることさえある。総合的な学習の時間、TTの拡充、少人数学習、習熟度別学習、絶対評価、二学期制、教科担任制、小中一貫英語教育、中高一貫教育などと枚挙にいとまはないが、児童生徒側に立って分析し検証した上で、確実に定着させていかなければ魂の伴わない形だけの改革になりかねない。

もう一つ、アンケート等の各種調査が水戸黄門の印籠のように扱われた場合のことが気になる。もちろん保護者や地域の人達に対しどのような力をつけるためにどう指導するかを明らかにして、その結果を評価して説明する必要がある、調査の実施は当然なことである。しかし、これが過度に陥った場合には、人気投票的に数

字で物事を片付ける風潮を教育に蔓延させてしまう恐れがある。さらに心配するのは、調査事項の内容のみが教育のメインディッシュと勘違いされることにある。教育には簡単な調査では図り知れない奥深い部分が多い。しかも、調査には特定の回答を求めるための強いフィルターが掛けられているのである。その内容と質を吟味し、その意図を見抜き、結果を他の情報と合わせて総合的に分析して判断し、行動しなければ教育の方向を見失うことにもなりかねない。

とにかく、説明責任、結果責任を金科玉条にして、玉葱を一枚一枚剥ぎ続けるように何事でも白黒付けて変わろうとする今だからこそ、地に足の着いた「教育工学」研究によって学校教育の足下を照らし固める必要がある。新しい時代を生き抜く力を伸ばす視点からのカリキュラム、新しい指導方法、評価方法などの研究開発と認知に全力を投入するときである。

日頃から切磋琢磨し、互いの力量を高めようと教育実践の先頭に立ってきた本研究会員の出番であり、正に使命だと思う。

激動する教育と教育工学

金沢大学教育学部附属教育実践総合センター 黒上 晴夫

1. 激動する教育

教育の世界には変化はあまり起こらないものだ、という認識がある。人は、自分が子どもだったときのままの教育活動が行われていると思いがちだ。しかし実際には、同じような教育の形はそう続かない。戦前から戦後にかけてそれはドラスティックに変わらざるを得なかったが、それをのぞいても、常に社会の教育に対する期待、社会経済の状況、家庭における労働の重さ、地域の絆、外国と関係など、さまざまな要因の変化にともなって「教育観」が変遷し、学校における「価値」も変わってきたのだ。教科のくくりさえも、時代によって異なっている。実は、教育は容易に遷ろうものなのである。

しかしながら、今教育に起こりつつある変化は、戦前・戦後の変化に匹敵するぐらいの激震なのではないかと思う。そのキーワードは「学校の自己決定と自己管理」である。

2. 方向性を読む

一方で、『論座』2002年1月号にもまた特集されたように、この流れへの抵抗は相変わらず激しい。文部科学省もそのような声に対応して、「学びのすすめ」というアピールを出すに至った。そこには、習熟度における個人差を明確に認めて、習熟に至らない子どもには補充指導をし、一方で理解した子どもには発展的な学習をさせる方策が示されている。そして、それを課外や家庭にも広げようとしている。さらに、指導者の得手不得手も考慮し、教科担任制の導入まで示唆している。

考えてみれば、こういったアプローチは一人一人の教科内容の理解を考えればあたりまえのことだろう。ある意味では「基礎・基本重視」の大合唱によって、長くタブー視されてきた「個人差」が浮き上がってきたとも言える。

しかしこの文書は、同時に「学ぶことの楽しさを体験させ、学習意欲を高める」ために、総合的な学習の時間と教科等を関連付けたり、社会人を登用したりすることを示している。ここ数年進めてきた所謂「ゆとり」の確認である。

つまるところ、具体的な個別化指導法によって学力を保障するという押さえをしながら、知識を実際に活用する場面を用意して、主体的・創造的な問題解決を青天井で期待するというのがこれからの教育の方向性だろう。

3. 教育工学への期待

これらを実現するためには、どのような指導法をとることができ、どんなメディアや学習リソースが利用可能か、そしてどうやって学習活動を評価するのかなどを、トータルに考える必要がある。そこで、さまざまな要因における可能性の中から最適な組合せを探すという“教育工学”の考え方が生きてくる。これから、インターネットの導入で学習リソースが飛躍的に豊富になり、時間割や学習集団といった要因も柔軟に設定できるようになる。それらをどう組み合わせればいいのかを考えなければならない。

しかし、それは教師に非常に煩雑な仕事を押しつけることにもなる。総合的な学習のカリキュラムを開発する一方で、教科の基礎・基本を徹底するための指導法や教材研究をしなければならない。さらには、発展的な学習内容も準備する必要がある。そして、それぞれの学習の評価を「絶対評価」するための基準を決めて、個別に評価しなければならない。この難題には、“協働”しか解はないだろう。ネットワークを利用して、日常的にノウ・ハウを共有するコミュニティがうまくできるかどうか成果を分けると思う。石川県教育工学研究会が、そのようなコミュニティとして有り続けてほしい。

黒上先生 9年間ご苦労様でした

金沢学院大学 吉田 貞介

黒上先生が金沢大学に着任されてからもう9年経ったのですね。その間、私の退職も含めて大変にお世話になりました。また、金沢の地域の教育振興にもご尽力くださり、心からご苦労様でしたと言わせていただきます。

いま振り返ってみると教育学部附属の「教育工学センター」から「教育実践研究指導センター」の改組にともない教官1名の純増があり、全国から多数応募された中から選ばれたのが黒上先生でした。選出委員の一人として黒上先生を選んで良かったと思っています。いや、当時期待した以上の仕事をやり遂げ実践センターの発展に尽くしてくれました。師の水越敏行先生とはほぼ同じ年齢時を金沢の地で過ごされ、同じように金沢の地で大きな教育的足跡をのこし、成長して大阪へ帰られることを心から嬉しく思っています。

ところで、黒上先生に初めて接したのは、私が昭和59年に大阪大学の水越研究室へ内地研究員として1カ年お邪魔したときです。黒上先生はまだ大学院生として勉学に励んでいました。その時、水越先生が指導する教育技術学教室は非常に活気があり、所属する院生たちが教育研究のために日々議論を重ねていました。村川雅

弘（鳴門教育大）、浅田匡（神戸大）、有本昌弘（国立教育政策研究所）、田中博之（大阪教育大）、木原俊行（大阪市立大）など、いまわが国の教育研究のホープ達が競い合っており、その一員として黒上先生も在籍し一段と光り輝いていました。

私が黒上先生に惹かれたのは、新しいシステム開発に関心があり、メディアセンスを持ち合わせている点でした。特に個別化、個性化の研究と学習のオープン化への強い関心が目を引きました。金沢大学へ来てからもいち早くインターネットの教育利用を提唱し、合わせて放送教育の双方向性にも着目したことは氏の先見性の現れと感じました。今後ますます1歩先んずる先導的な研究に取り組み、我が国の研究リーダーとしての道を歩まれることを期待しています。

いま振り返ってみると、教育実践総合センターへの改組、附属小学校のメディア環境の構築、地域の教育研究への指導等々、日々大変に忙しい思いをさせました。本当に有り難うございました。大阪へ行けば昔からの音楽仲間も多くいることと思います。その方面にも参加し有意義な生活を送ってください。

“学び”とは何かを問い続ける研究者・チェロの響きを持つ黒上先生

金沢経済大学 岡部昌樹

— プロフィールと赤い糸 —

黒上晴夫先生は昭和34年（1959年）に大阪で生まれ、昭和58年（1983年）大阪大学人間科学部を卒業された後、同大学の人間科学部研究科博士課程（教育学専攻）に進まれ、研究者としての道を歩まれた。金沢とのお付き合いが始まったのはこの時期からである。先生が技官や助手をされていた平成元年～平成3年ごろは学校現場でもマルチメディアなるものが注目を集めはじめたが、本格的なハイパーメディア教材といえば「文京文学館」だけだった。先生は教育システム工学講座の助手をされていた関係で交通安全に関するハイパーメディア教材の開発と実証研究に取り組まれた。黒上先生が開発された教材を用いて、金沢の地においても三和小学校を拠点に本格的な授業実践を試行することになった。当時の映像教育研究グループは吉田先生（石川県教育工学研究会会長）の指導の下、総力を上げて実践に取り組んだ。この研究成果は、黒上先生の下でまとめられ「ハイパーメディアによる交通安全教育教材の開発と評価」（学会誌；視聴覚教育研究：第17巻）に収録され、わが国にけるマルチメディア教材の開発・設計に火をつける結果となった。

この研究は先生のその後の研究テーマとなる“学習環境の創造”に少なからず影響したものである。当時、水越先生の指導のもと、共に研究に携わった田中先生（現大阪教育大学）、木原先生（現大阪市立大学）、山内先生（現東京大学）、村川先生（現鳴門教育大学）も、今では日本を代表する教育学研究者になっている。

この研究成果は金沢の映像教育研究グループ（現メディア教育研究グループ）に多大な影響を与え、その後のメディアミックスの授業設計の原型になった。

この研究が一段落した平成5年（1993年）に

黒上先生は、金沢大学教育学部附属教育実践研究センター（現教育実践総合センター）に助教として赴任してこられたのである。

— 先頭に立つコーディネーター —

金沢大学に赴任した翌年から、各種の全国大会が待ちうけていた。以下は黒上先生がコーディネートした代表的な学会等の全国大会である。

・1994年：第20回全日本教育工学研究協議会全国大会（金沢大会）

赴任の翌年には日本教育工学協会が主催する全国大会が金沢大学で開かれることになった。石川県教育工学研究会は総力を上げて組織づくりにあたった。勿論、黒上先生は“学び”の研究どころではなかったのではないかと思う。多忙の頂点で、行動しながら采配を振るうという神業を演じた。

・1996年：日本教育工学会第12回大会
（金沢大学）

日本教育工学協会主催の全国大会を乗り切った翌年には工学会からの打診があり、一年おいて大会は金沢大学で行われることになった。吉田先生も黒上先生がおられなければおそらく引き受けることはなかったと思う。石川県教育工学研究会だけでは到底不可能であった。それほど大きな学会だったのである。

・1999年：日本教育メディア学会第6回大会
（金沢大学）

またまた、金沢大学での学会開催が決まった。勿論、石川県教育工学研究会も総力を上げて取り組んだ。しかし、黒上先生の采配なしにこの大会を行うことは不可能であった。黒上先生の人格が為せる技でかき、まさに“チェロ”の響きが人を動かした。

関西大学へ行かれても、石川県教育工学研究を導き、叱咤激励してください。

愛すべき黒上さん

金沢大学教育学部教育実践総合センター 中川一史

・プロモーターとしての黒上さん

黒上さんとはじめて出会ったのは、もうかれこれ10年くらい前になるだろうか。私がまだ小学校の教員をしていたところに、神奈川県相模原であった教育工学関連協議会の会場だったと思う。その夜にはもう中華街でいっしょに記憶がなくなるまで飲んでいて。その後、高等学校の新教科「情報」の教科書の仕事をいっしょにやるようになって一気に「近い人」になった。気がついていけば、今は同僚。でも、金沢大学に元センター長の吉田先生と黒上さんがいなかったら、私もここに来ることはなかっただろう。私が来たことが良かったかどうかは別として、まわりの環境を着実に整える天才でもある。しかも無理はせずにスマートに。

・関西芸人としての黒上さん

しかしなんと言っても、黒上さんには学んだのは、その芸風だ。どんなに忙しくても、いや、忙しければ忙しいほど、1つのネタに多くの時間を費やすあのパワーはどこから来るのか？ 先日は、期日が迫った原稿を抱える中、私が飲み屋で酔っぱらっている醜態写真をさらに加工

をしたイタズラ写真を作るのに何時間もかけて作っていた。おそろべし黒上さん。さらに、どんなフォーマルな場でもオチをつけることを忘れない。きっとどこかの校長になり（なることはないだろうが）、卒業式の挨拶でもオチをつけるにちがいない。

その卒業式に保護者としては出たくはないが。

・教育実践研究者としての黒上さん

自分が大学の教官になって痛感するのは、研究者の理論あるいは理論的な話と、現場の実践の状況があまりにもかけ離れている、ということだ。これは、教育現場に足を運んで教育実践者とともに研究する研究者が思ったほど多くない、ということに起因するのではないかと思っている。そのような意味で、黒上さんは現場との距離を大事にする数少ない研究者であることはまちがいない。けっして大上段にかまえずに、実践者の目の高さで理論を組み立てていく。4月から働く場所は別々になってしまうが、これからも多くのことを黒上さんから吸収していきたい。約3年間であるが、いっしょにやってこれたことは幸せだった。

「ひと」と「学校」の可能性・関係性を追いつける

金沢大学教育学部附属教育実践総合センター 加藤隆弘

1. 「学校ってナンダ！ゼミ」にて

私の黒上先生との出会いは、金沢大学教育学部での学部生時代に遡ります。

社会科の教師を目指していた私は、卒業論文をまとめる過程でドイツの事実科教育、大正自由教育、戦後初期の社会科や生活単元学習などといったものに強く惹かれるものを感じていました。しかし同時に、仮に教員になることができたとしてもそう簡単に現場でその手の実践に取り掛かることはできないのではないかと、今やっている勉強が役に立つことはあるのか、など迷ったり意気込んだりしながら学生生活を送っていました。と、ちょうどその頃、同じ教育学部の仲間たちと開いていた自主ゼミで「教室に壁のない学校」や「自分たちで牛を飼う学校」の話などが報告されたのです。そんな変わった学校のネタをどこから仕入れてきたのか、と聞いてみると、かなりのスピードでベタベタの関西弁を操る、黒縁めがね先生の「教育工学」という授業だ、とのこと。4回生になった段階ですでにこのジャンルの単位はそろっていたのですが、思わず興味を引かれてその授業に出てみることにしたのです。

2. 「教師の役割」ってナンダ！

その講義は、毎回、新鮮な出会いに満ちたものでした。ノートパソコンを持ち込んでのプレゼンテーションなどさまざまな機器を活用した講義も初めてでしたが、それ以上に、さまざまな実践のVTRを見ながら、具体的に単元の作りや教師の役割などについて考えていく、そういった実際的な内容は、教師を目指して学んできた中で何かはたりないと感じていた、その空隙を見事に埋めてくれるものでした。

そうこうするうちにこの講義を受講するきっかけとなった、例の二つの学校について話が出てきました。「壁のない学校」→緒川小学校

をはじめとしたオープンスペースの学校、「牛を飼う学校」→長野・伊那小学校について、実際の様子を交えながら、その優位点のみならず、課題とされている点なども含めて紹介・分析が行われました。特に伊那小について、どうしてももっと知りたくなり、思い切って質問しにいったところ「2月に発表会見に行くでえ〜、いこか〜」と、驚くべき悪魔の？ささやきが…。

実際に見に行ってみると、「完全には納得がいかないが、なんだか楽しくなる」という、妙な感覚に襲われました。これまで頭に描いていた教師の有り様（黒板の前から大声でさまざまに指示を与え続ける授業の中心）とは全くかけ離れ、静かに児童の様子を見守る教師の姿。にもかかわらず、延々と作業を続ける児童の姿…。

いったいなぜ、子どもたちはここまで一生懸命になれるのか、教師はいったい何を考え、何をどのように指導しているのか…。この疑問を解くためにあと2年間、大学院で勉強してみようと思ったのが、現在に至るそもそもの《仕掛けられた》分岐点だったように思います。

3. 「現実」の、その先を見据える

驚くべきは、文部省が「総合的な学習の時間」などについて検討し始めるずっと以前から、学校カリキュラムと学習のあり方の抜本的改革について、指導における教師の意図や信念について、そして今日いわれるところの「情報教育」について、独自に研鑽を重ねられ、そのエッセンスを惜しげもなく、わかりやすく教育実践を学ぶ者へ伝えてこられたということです。その役割に対する期待は今日に至ってますます大きくなり、必要不可欠なものとなっています。

これからも教育について学び、実践するより多くの者の先頭に立ち、嚆矢を放っていただけることを期待しています。

初心者が参加しやすいホームページコンテストの企画

— 情報教育実践サイト FATHeRS コンテスト「あつまれ探検隊」—

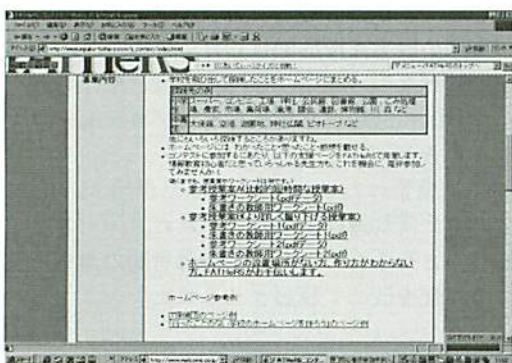
松任市立東明小学校 中條 敏江

1. 問題と目的

情報活用の実践力や総合力を育成する場としてもホームページ作成の学習は有効であるといわれているが、機器操作の苦手な教師にとって、ホームページを作成させる学習はハードルが高い。そこで、WEBサイト上で、日常の学習場面で利用できる学習課題のホームページコンテストを企画し、モデルとなる支援教材や相談できる環境を提供することで、経験の少ない指導者でもホームページを作る体験ができる考えた。

2. コンテスト「あつまれ探検隊」のデザイン

「あつまれ探検隊」では、ホームページ初心者でも参加できるように、サイト上にモデルとなる支援教材などを載せた支援ページを用意した。



3. 結果

コンテストは75チーム553名の参加であった。その指導者20人のアンケートをもとに結果を考察してみたい。

(1) ホームページ作成などの経験

ホームページの初心者と考えられる指導者は70%であり、参加児童生徒の85%はホームページ作成が初めてであることから考えると、コンテスト「あつまれ探検隊」が、初心者にとって敷居の低いコンテストであったかが理解できる。

(2) コンテストのテーマ

応募の動機とテーマ選定の回答から、今回の

コンテストは日常的な学習活動の発信としての参加や、身近な学習課題で容易に取り組めたため、初心者でも参加しやすい企画であったと考えられる。

(3) 取り組みにおいて困った時

取り組み中リタイアしたいと考えたとする回答は、初心者によく見られた。その場合、身近な同僚に支援を受ける率が高いことがわかった。しかし、回答者のうち2人は、初めてホームページにチャレンジし、コンテスト主催者のFATHeRSに支援を受けてホームページを完成させている。

(4) 支援教材の利用

提供した支援教材の中でも、授業例、ワークシート、ホームページ参考例については、経験者・初心者の半数以上が役立ったと回答している。初心者の支援のためにと考えて用意したが、経験者もモデルを参考に学習のイメージを持ってコンテストに参加したことがわかった。

4. 考察

以上の結果から、モデル等の支援教材が準備されたホームページコンテスト「あつまれ探検隊」は、作成経験の少ない指導者にとって敷居の低いコンテストであったと言え、ホームページ作成という新しい経験をするよい機会を提供できた。

また、その結果より、初心者でも参加しやすいホームページコンテストのデザインについて次のように示唆できる。

- ・ 日常の学習の時間でよく取り上げられている題材をコンテストの内容として取り込む。
- ・ 題材例、授業例、参考ワークシート、ホームページ参考例などのモデルは、学習時のイメージが描きやすく効果的である。
- ・ 全般にわたって相談できるシステムは、身近で支援を受けられない初心指導者にとっては大きな支援となる。

高等学校理数科「課題研究」における「情報活用の実践力」の育成

石川教育センター 中本 忠彦

I. 目的 「課題研究」を高める情報活動－

前任校（石川県立小松高等学校）では、95年度より2年生理数科の生徒に対し、「課題研究」の科目が設けられている。本研究では、「課題研究」の活動を通して、情報機器を活用する経験を積ませ、得られた結果や成果を評価し改善させることで、「情報機器を適切に選択・活用する能力」、「解りやすく伝えるため表現を工夫する能力」、「聞き手を意識して情報を発信する能力」といった「情報活用の実践力」の育成を図った。

II. 内 容

1. 研究のなかでの「情報活動」

研究をまとめる前に、テレビのニュース番組や情報番組を視聴させ、効果的な表現方法について話し合った。生徒は、樹木が吸収する二酸化炭素などの量を、本校体育館の大きさや、人間の一日あたりの息から排出する二酸化炭素量などと比較し表現して、樹木が二酸化炭素を減らすため、貢献していることを訴えようとした。発表では、改善すべき点がいくつか見つかって指摘は1つに留め、改善されたら次の改善に取り組むよう指示することで、生徒が自信を失わないよう留意した。発表後、「聞き手」による評価用紙や、ビデオをつかい、問題点を話し合った。

2. 交流を通じた「情報活動」

大気中の二酸化炭素量の測定場所を校内から校外に広げて調査するため、小学校の子どもたちに、電子メールで調査協力を依頼した。調査方法についての説明には、テレビ電話を利用し、図や実物を用意して説明したが、声が小さく、十分伝えることができなかった。テレビ電話を用いた自己紹介などの交流を増やすことにより、声も大きくなり、自信を持って意見を述べることができるようになった。

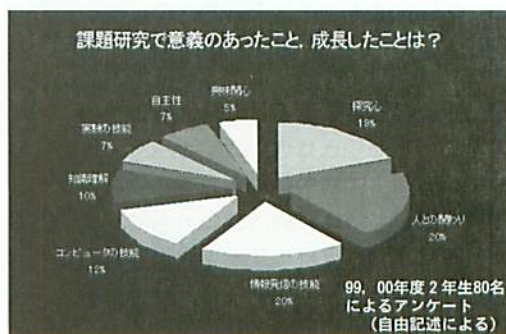
III. 成果 「やってみせ、言って聞かせて…」

コンピュータやテレビ電話などの情報機器は教師が実際に操作しながら説明することにより、機器を利用させることで、適切に活用する能力が高まっていった。

「聞き手」を意識した情報の表現、発信能力の育成には、マスコミでの表現技法や発信の工夫に加えて、前年度の発表が生徒の活動の刺激となった。また、教師もプレゼンテーションを意識した授業などで実践してみせることも効果的であった。

発表会での「聞き手」の評価をフィードバックし、プレゼンテーションを改善することで、情報を表現する技法や発信する能力が高まった。「校内発表会」、「三校合同発表会」、「中学生体験入学」3度の発表では、その都度「聞き手」が変わるので、「聞き手」の立場に立って表現を工夫させる指導を行うことができた。

また、「身についた力」を尋ねたところ、3割の生徒から「情報活用の実践力」に関する回答が得られた（下図）。



IV. 今後の課題

研究の内容を深めるためにも、情報を幅広く収集する必要がある。今後は、情報機器の長所を理解させ、適切に選択できる能力の育成を図りたい。

総合的学習における教師の力量形成に関する研究

石川県教育センター 村井 万寿夫

1. 要 旨

総合的学習においては、教科指導にはない新たな教師の力量が必要だと言われる。

そこで、必要とされる力量を分析し、教師個々の力量確認や自己の目標設定につながる力量形成モデルを開発した。また、そのモデルによって確認したり目標設定した力量が埋め込まれている学習デザインシートを開発した。

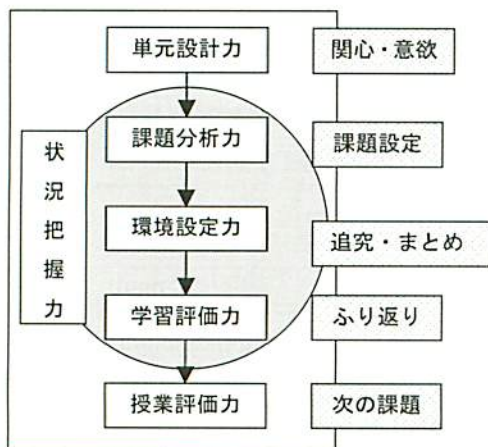
2. 研究の目的

総合的学習に必要とされる力量について整理と分析を加え、力量形成モデルと総合的学習を構想するためのデザインシートを考案しながら、力量形成の方略について明らかにする。

3. 開発した力量形成モデル

教師15名のアンケート調査から得られた力量、筆者自身の授業実践経験による力量、先行研究による力量、合計102の力量について、KJ法的手法によって分類した結果、6つの力量にまとめることができた。それを時系列順に並べ、しかも、総合的な学習の一連の流れに合わせてモデル化した。その一部を図表1に示す。

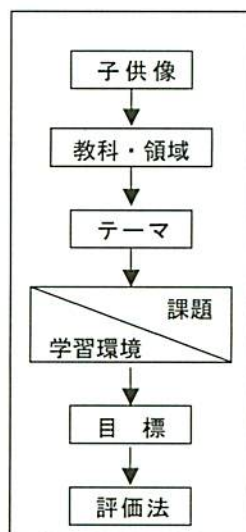
図表1 力量形成モデル



4. 開発した学習デザインシート

紙面の都合上、デザインシートの骨子のみを図表2に示す。

図表2 シートの骨子



5. 教師への適用

総合的学習における教師の力量形成のポイントは、教師自身の「意識化」とであると言える。

本研究では、そのための形成モデルを開発し、それをもとに教師個々の力量について検討してもらうことができた。

力量形成モデルをもとに、力量について検討を依頼した教師は105名である。

教師たちの感想は共通して「身につけている力量と身につけたい力量について意識することができた」と述べている。この意識化がさらに教師自身の力量を高めていくことになる。

学習デザインシートについては、「子供につけさせたい力を明確にし、それをどのようなテーマや課題から具体化していくか、そこに埋め込まれる目標と評価をどのように一体化させるか、一枚のシートでできるので有用である。」「学習デザインシートを用いることにより、備えたい力量を意識しながら具体的な授業をイメージできた。」と回答する教師が多かった。

6. 結 論

教師の力量形成の方略として、「力量形成モデル」や「学習デザインシート」が有用であることを検証できた。

平成13年度 小松・加賀コンピュータ研究会活動報告

小松市立串小学校 谷口 一登

1. 支部構成

支部代表：谷口 一登（小松市立串小学校）
 事務局：北村 義治（山中町立河南小学校）
 研究員：向出 章（小松市立矢田野小学校）
 河西 敦子（山中町立山中小学校）
 山崎 幸代（山中町立河南小学校）
 田中 謙治（加賀市立錦城東小学校）
 中川 知成（小松市立第一小学校）
 中川一史先生（金沢大学教育学部）

2. 活動方針

南加賀地区で、コンピュータ等のメディア機器を授業に活用できる人材を育成し、各地区でそれを広めていく。「コンピュータ等の情報機器をどのように授業に位置づけていくか」という目標のもと、年間1人1実践以上の取り組みから「レシピ案（活用案）」を作り、より良い方向性を探る。

3. 活動報告

平成13年度 活 動 報 告			
月	活 動 内 容	月	活 動 内 容
5/15	事務局打ち合わせ ・今年度の方針、年間計画検討	8月	WEB学級日誌プロジェクト参加
5/21	第1回研究会（於 河南小） ・今年度の方針、活動計画の確認 ・新規会員の紹介等	10/21	事務局打ち合わせ
5/27	県教育工学研究会総会 出席 （於 文教会館）	11/28	WEB学級日誌 オフラインミーティング参加 （於 金沢大学）
6/20	事務局打ち合わせ ・次回研究会について	12/3	第4回研究会（於 河南小） ・県教育工学発表会 原稿検討会 ・県教育工学大会 原稿検討会①
6/27	第2回研究会（於 河南小） ・レシピ案作成についての検討会①	12/8	県教育工学発表会 参加（於 押野小） 「パソコンを使ったレシピ作り」 「総合学習におけるパソコン利用」
8/8	第3回研究会（於 串小） ・レシピ案作成についての検討会②	2月	第5回研究会 ・県教育工学大会 原稿検討会②
8/23	県教育工学発表会 参加（於 条南小） 「図工科におけるデジカメ活用の実践」 「理科の観察学習におけるデジカメ利用」	3月	第6回研究会 ・県教育工学大会 プレゼン検討会 石川県教育工学研究発表大会 参加

4. 連絡先

	学 校 名	住 所	T E L	F A X	E-mail
支部代表 谷口 一登	小松市立 串小学校	小松市串町 乙1-1	0761 44-2031	0761 44-8161	tanig@komatsu.nsk.ne.jp
事務局 北村 義治	山中町立 河南小学校	江沼郡山中町 中田町ニの23	0761 78-0836	0761 78-0885	kit@po5.nsk.ne.jp

石川県教育工学研究会松任石川支部活動

松任市立東明小学校 中條 敏江

1. 今年度の方針

松任石川支部は立ち上がってまだ2年ほどしかたっていない。メンバーも情報教育初心者ばかりである。松任市や石川郡の全体の状況をみても情報教育という言葉に耳にするようになったばかりである。

そのため、今年度の方針を次の2点に置いた。

- ・地域の外でチャレンジしよう
- ・メーリングリスト（ML）で情報交換をしよう

地域の中での実践だけでなく、地域を越えた大きな場に出て行こうと考えた。他の地域の実践を見聞きすることで学ぶことも多いだろうし、その中で、発表することで得るものも多いだろうと考えた。

また、指導者である自分たち自身が情報社会に参加していくために、メディアによる情報交換をすることにした。同じ地域同じ職場にいてさえ、互いの実践を語り合い刺激し合う場を持つことはとても難しい。地域でのMLをつくり、そこで情報交換をすることで、メール交換によるコラボレーション能力もつくだろうし、お互いが理解し密な活動につながっていくと考えた。

2. 今年度の活動

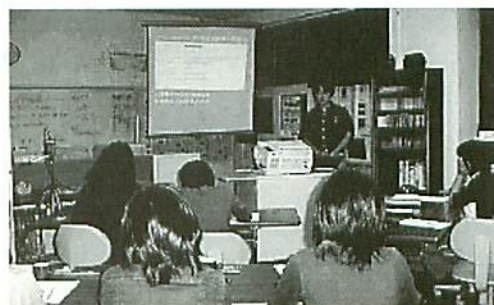
- 5月 第1回 研究会
- 7月 富山大会論文検討会 参加
- 8月 「夏の実践交流会」参加
- 第2回 研究会
- 全国教育工学富山大会支部論文検討会
- 10月 全国教育工学富山大会 発表練習会
- 全国教育工学富山大会 参加
- 12月 「冬の実践交流会」参加
- 第3回 研究会
- 3月 石川県教育工学大会 参加
- 北陸三県教育工学大会参加

全国大会や実践交流会で発表するために、事前に研究部の論文検討会で岡部先生にご指導を受けたり、論文をみんなで読み合わせたりした。また、全国大会の前には、周りに声をかけ、参

加者以外にも集ってもらってアドバイスを受けた。当日、発表者以外の参加者にビデオ撮影してもらい今後に備えた。研究部主催の実践交流会では夏に3人冬に2人が発表を行った。その際には声かけに応じて同じ地区の多くの方に参加していただくことができた。互いの実践の情報交換、また他地区の優れた実践に学ぶ大変貴重な場とすることができたように思う。

これらの活動への参加、調整もML上で行われたが、それらのやり取りが他の分野の話題に発展することも多く、MLがより活性化するという副次的な成果もあった。

3. 活動をふりかえって



富山大会発表練習会 東明小にて

情報教育初心者のメンバーが発表にチャレンジすることで、自信をつけ、自分の実践を振り返るよい機会となった。オブザーバーとして参加した者も、論文検討会や発表練習会で実践のまとめ方伝え方のポイントを学び、他地域での情報教育実践のトレンドに触れ、それを情報交換し合うことで、支部のメンバー全員の視野が広がった。少し情報教育というものがわかりかけてきた今年度。来年度もチャレンジを継続して支部の活動も活発にしていきたい。

今年度は実践交流会、論文検討会、TV会議支援など、石川県教育工学研究会研究部の活動に参加していくことで支部活動が活性化していった。そのなかで、岡部先生、加藤先生、村井先生をはじめとしてたくさんの方々にご指導を頂きました。ありがとうございました。

13年度河北コンピュータの会の活動報告

河北郡津幡町立条南小学校 飯田 淳 一

1. はじめに

河北地区ではコンピュータや情報教育に興味のある約20名で情報交換しながら活動をしている。昨年度からメーリングリスト (kick-ml@n sknet.or.jp) で打ち合わせや近況報告などを行っているが、そのメンバーは徐々に増え、現在では開設当初の約2倍になっている。

2. Microsoft Netmeeting による交流

今年度は「Microsoft Netmeeting による交流」に挑戦してみた。郡内の6校(大根布小、太白台小、井上小、英田小、笠野小、条南小)のコンピュータにビデオキャプチャーボードを取り付け、設定やアドバイスをを行った。

実践にあたっては、

- ① 教師同士が顔見知りで、すぐ打ち合わせができること
 - ② 児童の直接交流も可能であること
- を考え、近くの学校同士で行うことにした。

以下はいずれも2学期の総合的学習の時間(または生活科)の実践である。

(1) クラス対クラスの交流

・太白台小と大根布小の2年生の交流

生活科で自分たちの調べたことを、それぞれの町自慢としてNetmeetingで紹介しあった。2年生らしい質問や感想などで話し合いは盛り上がり、桜貝と松ぼっくりの交換や、実際にバスに乗って両クラスでドッジボール大会をするなど直接交流に発展した。

・大根布小と条南小の5年生による交流

両校とも河北潟を調べ、環境問題について考える取り組みを行っていたので、Netmeetingを通して、河北潟の未来や自分たちのできることなど述べ合った。その結果、春になったら合同でゴミ拾いをしようという話がまとまった。

(2) 学年対学年の交流

・井上小と条南小の4年生による交流

両校とも福祉について取り組んでおり、条南小の中間報告会の様子をNetmeetingを通して井上小でも聞き、感想などを述べ合った。その

後、合同での発表会を開き、井上小の発表を両校の児童でいっしょに聞くという交流に発展した。

(3) グループ対グループの交流

・条南小と英田小の6年生による交流

総合的学習の時間の、自分の将来を考え自分の生活を見つめるという活動の中で、互いの夢や思いをNetmeetingを用いて、両校のいくつかのグループ同士で意見交換することができた。

3. 動画コンテンツの作成

ビデオキャプチャーにより、図工科、家庭科体育科で使える動画コンテンツを作成し、校内サーバーに置いて、授業で使う試みも行った。

今年度は数本しかできなかったが、来年度は数を増やし充実させる予定である。

4. 地域情報データベース

県教育センターの情報百選河北郡編を作成するとともに、地域に伝わる民話などをアニメーション化した地域教材を作成中である。

5. ネットワークを活かした研究実践への参加

Eスクエアプロジェクト「子どもの広場」やパディコミュニケーションの「WEB学級日誌」に郡内の何校かで取り組み、その研究会へ参加し研修を深めることができた。

6. 実践発表交流会での5分プレゼン

県教育工学研究部主催の「夏・冬の実践発表交流会」において合計5人発表者を出すことができた。特に冬の会の前には、そのプレゼンの検討会を行うことができたことは、プレゼンをしない者にとってもたいへん勉強になった。

7. 次年度に向けて

今年度も定期的集まるといった会の運営ができなかったので、来年度は月に1回のペースで会員が集まり研修を深めることができるようにしていきたい。

またコンピュータ初心者や若い人をどんどん巻き込み、会をもっともっと活気のあるものにしていきたいと考えている。

【事業報告】 夏季セミナーⅠ・夏季セミナーⅡ

事務局長 村井 万寿夫

【夏季セミナーⅠ】 ～教育用コンピュータソフト体験研修会～

夏季セミナーⅠは、平成13年8月4日（土）に県教育センターを会場に開催されました。

このセミナーは、賛助会員のシャーププロダクト株式会社の支援のもと、石川県教育工学研究会と石川県小中学校視聴覚教育研究協議会との共催によって開催されており、今年度で5回目を数えます。

当日は、北は輪島市から、南は白峰村から、合わせて26名の先生方が参加されました。

参加された先生方は、グループウェア『スタディノート』を使って、電子メールや電子掲示板などの体験をしました（写真1参照）。



写真1 グループウェア体験

どの先生もいつもの「教える立場」をしぼらく忘れ、「学ぶ立場」で楽しいネットワーク体験ができたようです。

【夏季セミナーⅡ】 ～授業でのパソコン活用研修会～

夏季セミナーⅡは、平成13年9月8日（土）に県教育センターを会場に開催されました。

このセミナーは、賛助会員のNEC北陸支社の支援のもと、石川県教育工学研究会の恒例セミナーとして開催されており、今年度で3回目を数えます。

当日は10名の先生方が参加され、統合型ソフトであるスーパーYUKI21iの体験をしました。インストラクターは、NEC北陸支社のSEである蚊戸美恵子さんで、はじめに、統合型ソフトであるスーパーYUKI21iの概要説明がありました。

その後、画像転送システムを使いながら、スーパーYUKI21iによる作品例を紹介し、どんなことができるのかについて、イメージを高めました。

今年の研修会の特徴は、総合的学習を視野に入れたことです。具体的には「総合的な学習の時間」を想定し、環境番組を視聴した後、「分からないこと」や「もっと調べたいこと」などを出してもらい、それを広辞苑（CD-ROM）を使って調べ、調べたことをスーパーYUKI21iに取り込み、学習情報としてまとめていきました（写真2参照）。



写真2 環境番組の視聴

夏の実践交流会報告「5分プレゼンがあなたを変える！」

河北郡津幡町立条南小学校 飯田 淳一

1. 実践交流会のねらい

今年度新しく設けられた研究部の企画のうち企画2（地域を超えた授業実践研究）の第1弾「夏の実践発表交流会」は、8月23日、助言者に金沢経済大学の岡部昌樹先生をお迎えして津幡町立条南小で行われた。

この会のねらいは、以下のようである。

- ① 普段顔を合わせることが少ない他地域の実践を聞き、都市間で交流を深めながら刺激あって全体のレベルアップを図ること
- ② 情報教育の初心者をまきこむこと
- ③ 教師自らのプレゼンテーション力を高めるきっかけとなること

またサブタイトルは「5分プレゼンがあなたを変える！」とし、広報に努めた。

2. 発表内容および発表者について

「地域を超えた授業実践」ということで、郡市を越えて発表者を募り、11名に情報機器を活用した授業実践を発表していただいた。実践を5分間のプレゼンテーションにまとめるという難しい条件にも関わらず、どの発表もわかりやすく、岡部先生の的確な助言とともにたいへん有意義な会となった。

以下は発表内容と発表者である。（敬称略）

- ① ホームページ作りを学習に生かしたもの
 - 初めてのホームページ作り
松任市立東明小学校 中野淳子
 - 朝日小学校に三和小学校を教えよう
金沢市立三和小学校 谷内幸恵
- ② デジタルカメラを学習に生かしたもの
 - 算数のひきざん学習の導入
金沢市立泉野小学校 高 静
 - 図工科におけるデジカメ活用
小松市立串小学校 谷口 一登
 - 本バラ4の1書店
津幡町立条南小学校 山本 瑞穂
 - 図工科「ランチをどうぞ」導入
金沢市立三和小学校 宮本美恵子

○理科の観察におけるデジカメ利用

山中町立河南小学校 北村 義治

③ コンピュータを効果的に使った学習

○テンプレートを使った初心者向けメディア

野々市町立御園小学校 長沢 哲也

○教室でのプロジェクター利用

野々市町立野々市小学校 正来 洋

○動画を利用した体育科実技

津幡町立条南小学校 柴田 勝俊

④ 学校でのコンピュータ利用について

○校内ネットワーク作り

津幡町立条南小学校 飯田 淳一

3. 会を終えて

参加者は74名と予想よりはるかに多く、やはり今の時代、たくさんの教師に求められている企画なのだという実感を持つことができた。当日の参加者のアンケートからもそれを伺い知ることができる。

これからもこのような会を企画し、たくさんの参加者と共に、教師の力量を高めていきたい。＜当日のアンケートより＞

- ・とても有意義な時間をもてた。いろいろな実践例は楽しくてやってみようと思うものがたくさんあった。今回の発表はすぐに明日からの授業に役立つような内容でありがたかった。
- ・コンピュータやデジカメをもっともっと授業の中に取り込んでいきたいと思った。今日勉強したことに自分の持ち味を加えてまねすることから始めていきたいと思う。
- ・いろいろな実践を聞いて、自分も新しいことにチャレンジできそうな気がした。
- ・コンピュータなどを使う際はまず自分の技術向上を考えてしまいがちだが、子どもにどんな力をつけたいか、そのためにどんな手だてが効果的かをじっくり考える必要があると思った。
- ・岡部先生の講評は情報教育に限らず広く教育全般につながるものも多かったので、満足できる会になった。

冬の実践交流会報告

金沢市立押野小学校 坂上 則子

1. 冬に向けて

地域を越えた授業実践研究の一つの企画として、今年度は県内での実践を紹介し、広めたいと考え、年間2回の実践交流会を企画しました。夏におこなった交流会を受けて、より交流のすそ野が広がるように冬の交流会のあり方を考えました。

交流会の目的は各校での取り組みの紹介と教師自身のプレゼン作成能力の向上の2つであると考えています。伝えたい内容をわかりやすく参加者に伝えるという力を何よりもまず教師自身が身につけることが取り組みのねらいの明確化につながると思われるからです。またいろいろな実践を知ることにより教師の視野が広がり新たな実践につながるのではないかと考えました。夏の交流会後のたくさんの感想を読み、冬に向けて新たな実践がたくさん紹介できるようにとの気持ちを新たにしました。

2. 冬の実践交流会

冬の実践交流会は12月8日(土)金沢大学の加藤隆弘先生を助言者をお願いし、金沢市立押野小学校でおこないました。あわただしい時期にもかかわらず70名近くの参加者がありました。今回は8つの実践が紹介されました。また5分間プレゼンが5本、15分間プレゼンが3本とプレゼンの時間を変えて発表していただきました。

実践交流会の根幹である5分間のプレゼンによる各校の取り組みの様子を紹介はもちろですが、15分間程度の長めのプレゼンも入れていくことで、伝えたい内容を最適に表現していく方法を模索できるのではないかと考え2通りのプ

レゼンで発表していくことにしたのです。5分間は思ったより短くて中身が十分伝えきれないという思いが強く、実際発表時間も5分間を超えることが多かったのですが、逆に15分間になると時間が少し余ってしまうことが多く、時間を有効に使うこと、時間配分の大切さに気づかされました。また、加藤先生からもプレゼン作りの技術的なこと以外に作るときの心構えについていろいろ教えていただきました。



3. 毎日の実践へつなげるために

実践をする教師自身が何をどのようにしたいのか、何を子どもにつかませたいのかをいうことを明確にしていくことの重要性がプレゼンを作成し発表するという活動を通して実感できたように思えます。交流会での各校の実践はどれもいろいろなメディアを有効に利用したものが多く、「これならやれそうだな」、「今まで尻込みしていたけれど、せっかくある機器を使ってみようと思った」等の前向きな感想がたくさんありました。この思いが続き実践を重ねていくことができればと思っています。

第42回石川県視聴覚教育研究大会 能美大会 報告

石川県小中学校視聴覚教育研究協議会事務局員 嶋 耕二

1. はじめに

10月19日（金）に、能美郡3町において、「第42回石川県視聴覚教育研究大会」が行われた。

今大会は、「一人ひとりの個性を生かし、「生きる力」を育むために21世紀を築く視聴覚教育の在り方を追求しよう」の研究テーマで、視聴覚機器の特性を生かしながら、授業方法の改善を行い、自己実現を実感し、情報の選択・活用・発信する能力の育成を目指した研究の成果が発表された。

2. 幼稚園・保育所

「一人ひとりが遊びの中で、さまざまな体験を通して豊かな感性を育む視聴覚教育の在り方を追求しよう」の研究テーマで、根上町立福岡保育園と川北町立中島保育所において公開保育が行われた。

NHKの番組を視聴することで、子どもに感動する姿が見られたり、友達とのつながりを深めた保育が公開された。

3. 小学校

「一人ひとりの自ら学ぶ力と学び合う喜びの実現に向けた視聴覚教育の在り方を追求しよう」の研究テーマで、根上町立浜小学校において公開授業が行われた。

子どもの発達段階に応じて、発表の道具として視聴覚機器を用いたり、身近なところにある情報をデジタルカメラで提示したり、携帯電話やTV会議システムなど新しい機器を用いての授業が公開された。

4. 中学校

「生徒自らが情報を活用し、進んで課題の解

決に取り組み自己を表現する力を育む視聴覚教育の在り方を追求しよう」の研究テーマで、川北町立川北中学校において公開授業が行われた。

コンピュータを用いて、進路学習におけるプレゼンテーションや情報提示、総合的な学習の時間では、グループごとに必要に応じて視聴覚機器を選択し、活用していた。

5. 高等学校

「情報化社会の一員としての生きる力をつけるための視聴覚教育の在り方について考える」の研究テーマで、石川県立寺井高等学校において公開授業が行われた。

DVDを用いて教材の理解を助けたり、LL教室のシステムを用いて会話練習を行っていた。

各公開授業の後、校種ごとにそれぞれ分科会が行われ、研究成果の提案があった。

（幼稚園・保育所 5提案、小学校 3提案、中学校 2提案、高等学校 2提案）

6. 全体会

午後から、根上町総合文化会館で全体会が行われた。

昼食時には、昨年度からのポスターセッションがあり、「視聴覚機器を用いた探索学習」の実践例が県内各都市から発表された。

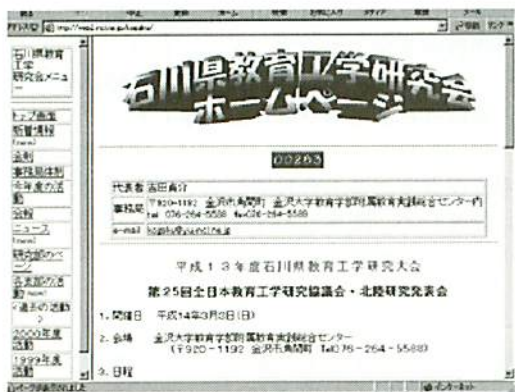
今年度は、模造紙での発表だけでなく、コンピュータを用いての発表もあり、大変充実していた。

全体会終了後、NHK金沢放送局編成事業アナウンス副部長 渡部英美氏による「教科を越えた授業のヒント」という演題で記念講演が行われた。

石川県教育工学研究会ホームページ公開中

URL <http://www.incl.ne.jp/kogaku/>

WEBページ担当 扇台小学校 清水和久



9月より石川県教育工学研究会のホームページを公開しています。このサイトではニュースや会報、日常的な活動の様子を紹介しています。以下その項目を紹介をします。

1. 新着情報

その時々最新の活動を紹介してあります。最近の話題としては、12/8「冬の交流実践会」などの様子を掲載してあります。

2. 事務局体制

組織図や、事務局内の仕事の割り振りが載せられています。会則なども参照できます。

3. 今年度の活動

- ・8/4「夏期セミナー1」
- ・8/23「夏の実践交流会」
- ・9/3「ノンリニア編集講習会」
- ・9/8「夏期セミナー2」
- ・11/26「第2回研究部会内容報告」
- ・12/8「冬の実践交流会」

今年度行われた夏と冬の実践交流会では、各会とも80名近くの先生方を集め、日頃の実践の成果をプレゼンしていただきました。そのときの様子や感想などを写真とともに掲載してあります。

4. 会報

61号の会報の内容をPDFファイルにて掲載しています。62号の会報も掲載予定です。

5. ニュース

今まで郵送していたものを、今年度よりWEBページ上で公開しています。セミナーのお知らせや、研究発表会の募集、日程などを掲載しています。

6. 研究部のページ

研究部のページ

今年度は5つの企画を中心に動いています

企画1	校種を超えた授業実践
企画2	地域を超えた授業実践・実践交流会
企画3	交流(支援)プロデュース
企画4	河北・小松・松任石川の各支部の活動
企画5	学習会

今年度より作られた目玉の研究部では5つの企画が立ち上がっています。企画1では、「ネット社会の歩き方」のWEBサイトを小中高の異校種で見て、比較や交流を目指しました。企画2では、今年度の活動のところでも述べた夏と冬の実践交流会を企画し、大成功を納めました。また、企画3では、学校間でテレビ会議を行うための支援をしてきました。企画4では各支部の活動を紹介しています。

このように、WEB上で石川県教育工学研究会の活動の様子をわかりやすく、具体的に紹介できるようにがんばっていますので、皆さんもぜひアクセスしてみてください。

<東明小・佐沼小交流プロデュース>



12月4日
今日は、東明小学校と宮城県の大沼小学校での6年生のTV会議がありました

ねらいやシナリオを TV会議のメーリングリスト上で討議し

「学校が変わる」「授業が変わる」「子どもたちが変わる」

— 金沢市の情報教育環境整備 —

金沢市教育研究センター 能波 裕 司

1. はじめに

金沢市では、文部省のミレニアムプロジェクト「教育の情報化」をうけて、「子どもたちが変わる」「授業が変わる」「学校が変わる」という状況をめざして、

- (1) 小中学校情報教育機器等の新整備計画の実施
- (2) 市内小中学校の校内LANの整備
- (3) 教育用高速ネットワーク「edねっと金沢(かなざわ)」の整備
- (4) 教育研究センターの機能充実

以上の4点について平成13年(2001)度より3年計画で、行っています。

2. 情報教育機器等の整備および校内LANの整備

文部省の「各学級の授業においてコンピュータを活用できる環境の整備」をうけ、金沢市もその施策に沿って、今年度は小学校21校+1分校、中学校10校の整備を実施しました。



整備内容は、コンピュータ教室を二教室にして、各21台のパソコンを導入。第2教室には、特別教室での活用も考え、ノート型パソコンも導入しました。

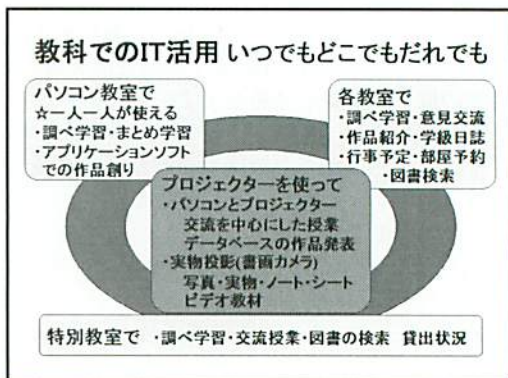
普通教室には、コンピュータ教室まで行かなくても調べ学習などができるよう、デスクトッ

プ型パソコンを設置しました。国の規準では、普通教室2台ですので、もう一台は、ノート型パソコンとし、先生方が教材作成や校務処理などを行うためのパソコンにしました。

特別教室等の6台については、校長室、職員室、保健室に各1台設置。あとの3台は図書室に設置して、図書室を学習情報センターとしての機能を持たせたいと考えました。

また、デジタルカメラやプロジェクターを5～7台導入することで、プレゼンテーションや提示用のソフトウェアを使った普通教室のパソコンの活用など利用のしかたが広がると考えられます。

また、校内LANを整備することで、どの教室からでもインターネットに接続可能となり、「いつでも、どこでも、だれでも」必要な情報を得ることができるようになります。



ソフトウェアについては、校内LANの特長を生かした、グループウェアによる学習支援システムやネットワーク対応型の教材コンテンツを導入しました。児童生徒用のグループウェアには、授業支援のためのサポーターがはいり、授業の素材づくりや先生方への活用の提案などのサポートを行い、コンピュータ操作等に不慣れな先生でもコンピュータを使った授業に取り組めるようにサポートを行っています。

3. 「edねっと金沢 (かなざわ)」の整備

各学校の整備にあわせて、金沢市教育研究センター内にサーバーを設置し、各小中学校と教育委員会などの教育機関を光ファイバーで接続した教育用高速ネットワーク「edねっと金沢 (かなざわ)」を稼働しました。

「edねっと金沢 (かなざわ)」では、インターネットの接続環境を提供するだけでなく、10Mbps という高速回線の利点を利用して、テレビ会議システムによる学校間交流や動画コンテンツの配信も可能になります。

教育研究センターは、「教育情報の拠点」として、研究物・発刊物のデータベース化、市内小中学校の教育課程・指導案等のデータベース化、教育素材のデータベース化などに取り組み、教育情報を共有化し、必要な情報をどこからでも取り出せるように教育情報の公開を行っています。

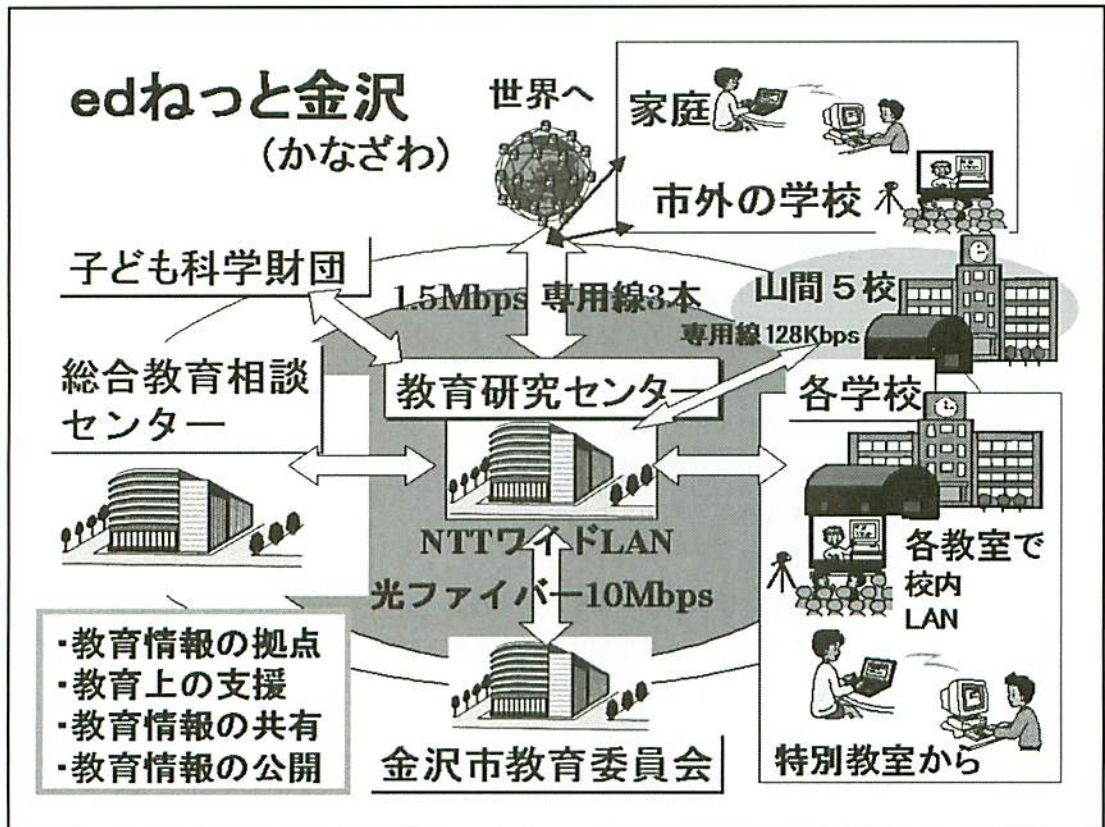
また、共通のグループウェアを使うことで、先生方の連絡や教育委員会・教育機関との連絡がよりスムーズになっていきます。

4. 今後の課題

ネットワークの整備をはじめ、情報教育の環境整備が進み、どの授業でも情報収集や情報交換、情報発信などが今まで以上にスムーズに活用できるようになってきました。これらの整備を十分に生かすためには、先生方がいろいろな場面で活用して、その実践を蓄積していくとともに、学校としての組織的な取り組みが必要になります。

また、操作技術だけではなく、情報モラルの指導も小学校、中学校を問わずこれからますます重要になります。コミュニケーションのマナーや個人情報・著作権の保護などに十分注意を促す必要があります。

子どもたちが情報通信社会での被害者や加害者にならないよう、教育活動全体を通して、善悪の判断、社会生活上のルールを守ろうとする態度を育成していくことが大切になります。



平成13年度石川県教育工学研究大会 第25回全日本教育工学研究協議会北陸研究発表会

主 催 石川県教育工学研究会・日本教育工学協会
金沢大学教育学部附属教育実践総合センター

1. 開催日 平成14年3月3日(日)
2. 会 場 金沢大学教育学部附属教育実践総合センター
(〒920-1192 金沢市角間町 Tel 076-264-5588)

3. 日 程

受 付	挨拶	(1) 分科会 自由研究発表	昼 食 (理事会) 12:20～13:00	(2) 全体会		
				記念講演	討論会	
9:30	10:00		12:05	13:10	14:10	15:30

4. 内 容

(1) 分科会

A分科会 (メディア・ネットワーク利用) 1階：視聴覚室

座長 中川 一史 (金沢大学)

- 1) 山下 雅美 内灘町立大根布小学校 10:05～10:25
やまなしから賢治へ
～子供の広場の実践より～
- 2) 内垣戸貴之 黒上晴夫・松島昌代 10:25～10:45
金沢大学教育学部附属教育実践総合センター
地上波デジタル放送を利用した授業実践
- 3) 米澤 若菜 中川一史 10:45～11:05
金沢大学教育学部附属教育実践総合センター
電子掲示板を利用した交流学习に関する事例研究
～学校間交流プロジェクト「子どもの広場」での実践～
- 4) 山下 匡 輪島市立町野小学校 11:05～11:25
学習におけるWebページ作成の有用性について
～総合的な学習の時間の実践から～

- 5) 森 正人 中島町立鉤打小学校 11:25～11:45
「体験」から「活用」をめざしてのテレビ会議
- 6) 守田 健雄 石川県立翠星高等学校 11:45～12:05
教科「情報」導入までの問題点の検討

B分科会 (メディアの活用、授業設計・評価) 2階:教育実践研究室

座長 岡部 昌樹 (金沢経済大学)

- 1) 廣田 恵子 小松市立矢田野小学校 10:05～10:25
「人」から学習空間を広げるメディア活用の実践
～社会科を通して～
- 2) 田中 謙治 加賀市立錦城小学校 10:25～10:45
総合的な学習におけるメディア利用
～中学年の調査活動を中心にして～
- 3) 藤垣 好美 松任市立北陽小学校 10:45～11:05
情報発信の場を取り入れた社会科の授業改善の試み
～テレビ局見学と番組を制作し発信する活動を通して～
- 4) 池田 利昭 県立小松養護学校 11:05～11:25
養護学校におけるパソコン利用の試み
個に応じた状況設定と教材作り
- 5) 細川都司恵 11:25～11:45
総合的な学習における実践力を引き出す教師の支援
～ARCSモデルを評価の視点として～
- 6) 中野 淳子 松任市立東明小学校 11:45～12:05
岡部 昌樹 金沢経済大学
ビデオレターによるメディアの特性を意識した
コミュニケーションスキルの育成

(2) 全体会

- 1) 開会挨拶 (吉田貞介会長)
- 2) 記念講演 (黒上晴夫副会長)
「教育工学研究の現状と課題 ～今、授業研究に期待する～」
- 3) 討 論 会 (登壇者: 吉田貞介 岡部昌樹 黒上晴夫 中川一史
司会者: 村井万寿夫)
「教育工学研究の現状と課題」
- 4) 閉会挨拶 (押野市男副会長)

平成13年度 石川県教育工学研究会事業報告

事 業	期 日	概 要
1 総 会 理 事 会	5月27日	平成13年度総会（於：文教会館） 40名参加 平成12年度事業報告と決算報告 平成13年度事業計画案と予算案の決定
	3月3日	平成13年度理事会（於：金沢大学） 20名参加 平成13年度事業報告と中間決算報告 平成14年度事業計画案と予算案及び役員の審議
2 研究事業	5月27日	教育討論会「総合的学習における英語活動」 40名参加
	7月8日	情報教育セミナー in 金沢（金沢学院大学）〔共催〕 150名参加
	8月4日	夏季セミナーⅠ「教育用コンピュータソフト体験」 30名参加
	9月8日	夏季セミナーⅡ「授業でのパソコン活用研修」 10名参加
	10月26～27日	第27回全日本教育工学研究協議会 第15回コンピュータ教育研究協議会 第6回全日本情報教育研究協議会全国大会富山大会 への参加 8名参加
	12月8日	冬季セミナー「冬の実践交流会」（研究部主催） 70名参加
3 刊行事業	7月、3月 (年2回発送)	研究会ニュース（A4版、2頁、300部） ※年間を通じて当会 Web ページにてニュースを更新
	7月	会員名簿（350部）
	7月、3月	会報（61号、62号、B5版、24頁、350部）
	3月	第27号研究紀要（B5版、50頁、350部）

編 集 後 記

当研究会副会長である黒上晴夫先生（金沢大学教育学部）が、関西大学へ転任することになった。9年間ではあったが、黒上先生には大変お世話になりありがとうございました。そこで、黒上先生が金沢を去られるにあたって、ミニ特集を組むことにした。また、金沢市の情報教育環境整備について、市教育研究センターの能波先生に寄稿いただいた。

最後になりましたが、原稿執筆等でご協力いただきました先生方に厚くお礼申し上げます。

【会報担当】

会費納入についてのお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入をお願いします。 年額 3,000円

平成14年3月3日発行

発行者 石川県教育工学研究会
 代表者 吉田貞介
 事務局 〒920-1192 金沢市角間町
 金沢大学教育学部附属
 教育実践総合センター内
 TEL 264-5588 FAX 264-5589
 印刷所 ㈱小林太一印刷所
 TEL 238-5454 FAX 238-5453